

解 説

古報文『明五石見の震災』

松 井 整 司*

Archives of “The Iwami Earthquake of 1872”

Seiji Matsui*

ま え が き

このたび地学関係学術雑誌のはしりともいうべき「地学雑誌」の中の「浜田地震」に関する古報文(縦書き)に接する機会があった。筆者は農商務省技師理学士巨智部忠承氏(のち理博, 地質調査所長)で, 報文は第1集第3巻(明治22=1889年3月25日刊) p.85~89と, 第4巻(同年4月25日刊) p.137~141の2回にわけて掲載されている。

文語調の文体にやや戸惑いながらも一応は読み終えたが, 現役の方々には口語調の方が読みやすかろうと僭越ながら変換作業を試みた。また, 理解の一助にと参考図1・2を作成した。もとより浅学, 誤りをおかせば原著に対する冒瀆になるとおそれているが, 広くお読み頂くことに意義があると思考しあえて公表する。諸賢のご指導を待ちたい。

なお, 以下の本文中の()は原文中のカッコ書き部分をそのまま転記したもので, []は訳者が付加したもので, □付数字は参考図1・2に共通する番号で山名等を表し, 所在等が不確かな場合は[?]を付した。

地学雑誌第1集第3巻[明治22年3月25日刊]所載

明五石見の震災

[題意: 明治5年におこった石見地方の震災]

明治5年旧暦2月[西暦1872年3月], 石見の国[島根県西部]の北東部に大きな地震があった。昨年の明治21年冬に公用で石見地方を巡回する機会があり, その時, 震災のありさまを人々が語るままに聞き書きした。これは明治維新後の一大地震であったことを報告する。

報告に先立って, あらかじめ中国火山脈の配置, 地震を起こす原因となる地中のエネルギーが今でも石見地方に潜在している徴候を地学的に説明しておく。

中国の主な火山脈

中国には一本の火山脈がある。それはほぼ地勢と一致し東西方向に走るが, 位置は北に偏っている。西は長門[山口県

西部~北部]の豊浦郡・大津郡あたりから日本海に沿って若狭[福井県西部]にのび, なお北陸道から信濃[長野県]に至って別の火山脈と合流する。これが中国火山脈の本線である。この東西性の本線を横断してほぼ南北に走る支線が何本かあるが, 両者の交差するところには険しい山や山なみがあって, かつての噴火の余勢としての温泉や冷泉がそれらの近くにある。

よく知られている山で火山岩からなるものは, 山口県では雨乞山①[雨乞岳とも], 高山③。島根県では青野山④, 大江高山⑦, 三瓶山⑧, 女亀山⑨。鳥取県では大山⑩, 三徳山⑪, 鉢伏山⑫, 鷲峰⑬, 県東部の岡山県境にある黒岩山⑭[?], 兵庫県境の扇の山⑮などがあり, 岡山県には大ヶ山⑯[大ヶ山とも]がある。これらの山々は噴火口のあるなしにかかわらず周辺に数個の冷泉鉱泉を持っている。

また, 火山脈の本線からあまり遠くないところには, 古い噴火山の性質を持っているものが多い。たとえば, 山口県の笠山②, 飯野山⑥[?], 島根県では大栗山⑤, 宍道湖の嫁が島⑩, 玉造の南から東忌部の黒目山[?]に至る峯々, 松江の高山①①, 手間天神島①②[塩楯島とも], 中海の大根島および江島①③, 飯石郡の入間周辺, 能義郡比田の東部。鳥取県では日野郡中祖付近, 三徳山①④, 毛無山①⑤, 円通寺山①⑥[?], 駒馳山①⑦, 岡山県では蒜山①⑧周辺, 兵庫県の間鍋山①⑨, 米日山①⑩, 但馬富士①⑪[三開山とも], 田倉山①⑫などがある。

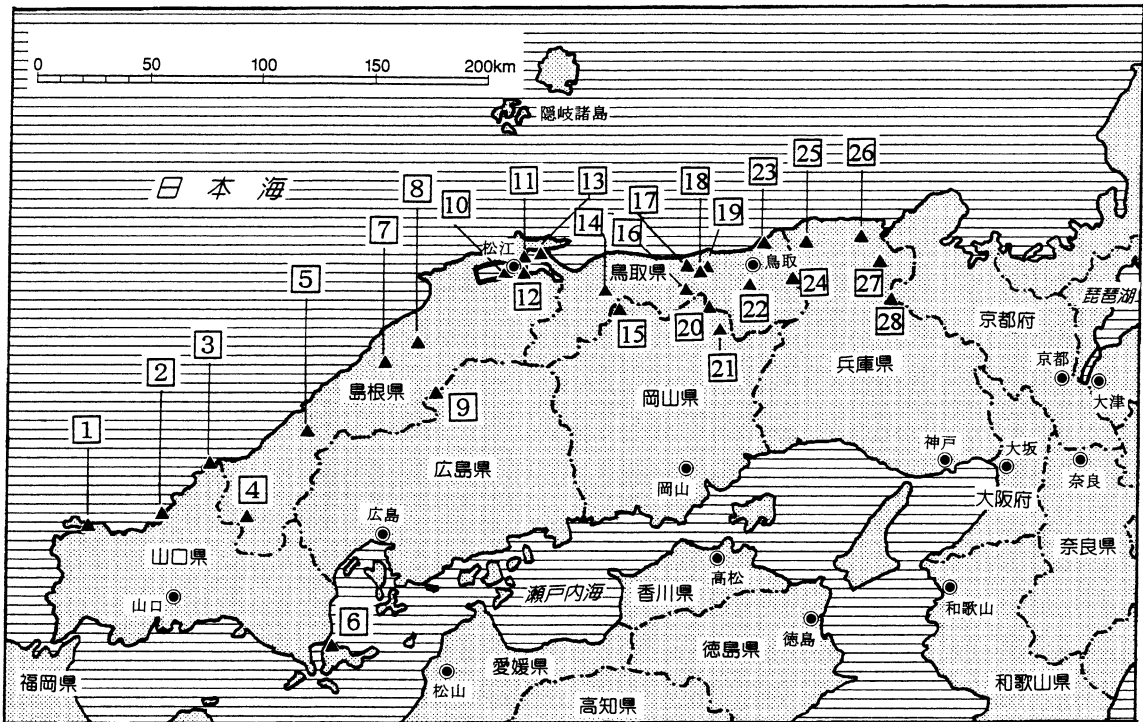
これらの山々をつくる岩石は酸性岩と塩基性岩に大別できる。前者は一般に険しい山(大山④, 三瓶山⑧, 青野山④, 大江高山⑦, 鷲峰⑬の如き)か, 形の変った山(鳥取県智頭郡のイモリ山[?], 円通寺山①⑥[?]の如き)である。また, 後者はなだらかな丘のような地形(萩北方の島々, 大根島⑩, 間鍋山①⑨, 田倉山①⑫の如き)をつくっている。

火山は一般に死火山・休火山・活火山に分けられるが, 中国には今噴火の徴候を示すものではなく, 昔の活動の名残をとどめる温泉があるに過ぎない。これら三種の火山について簡単にのべる。

死火山は噴火の言い伝えや記録はないが, 岩石学的見解や地形を見て, かつて火山活動をしたことがあると認められるもの。休火山は今では活動していないが昔活動したとの言い伝えがあり, 当時の噴火の様子が記録されているもの。活火山は阿蘇山や浅間山などのように, 日常的に水蒸気などを

* 文理学部地学専攻3期卒

〒694-0064 大田市大田町大田 口 932-1



参考図1 原文で「中国火山脈」の説明として現れる山々の位置。

- ①雨乞山 ②笠山 ③高山 ④青野山 ⑤大屎山 ⑥飯野山 ⑦大江高山 ⑧三瓶山 ⑨女亀山 ⑩嫁が島
 ⑪嵩山 ⑫手間天神島 ⑬大根島・江島 ⑭大山 ⑮蒜山 ⑯徳山 ⑰鉢伏山 ⑱鶯峰 ⑲毛無山 ⑳黒岩山
 ㉑台ヶ山 ㉒円通寺山 ㉓駒馳山 ㉔扇の山 ㉕間鍋山 ㉖来日山 ㉗但馬富士 ㉘田倉山 ●は県庁所在地

噴出しているものをいう。だから、休火山といわれるものは、50年100年もしくは数100年の昔に噴火した山と考えるべきである。

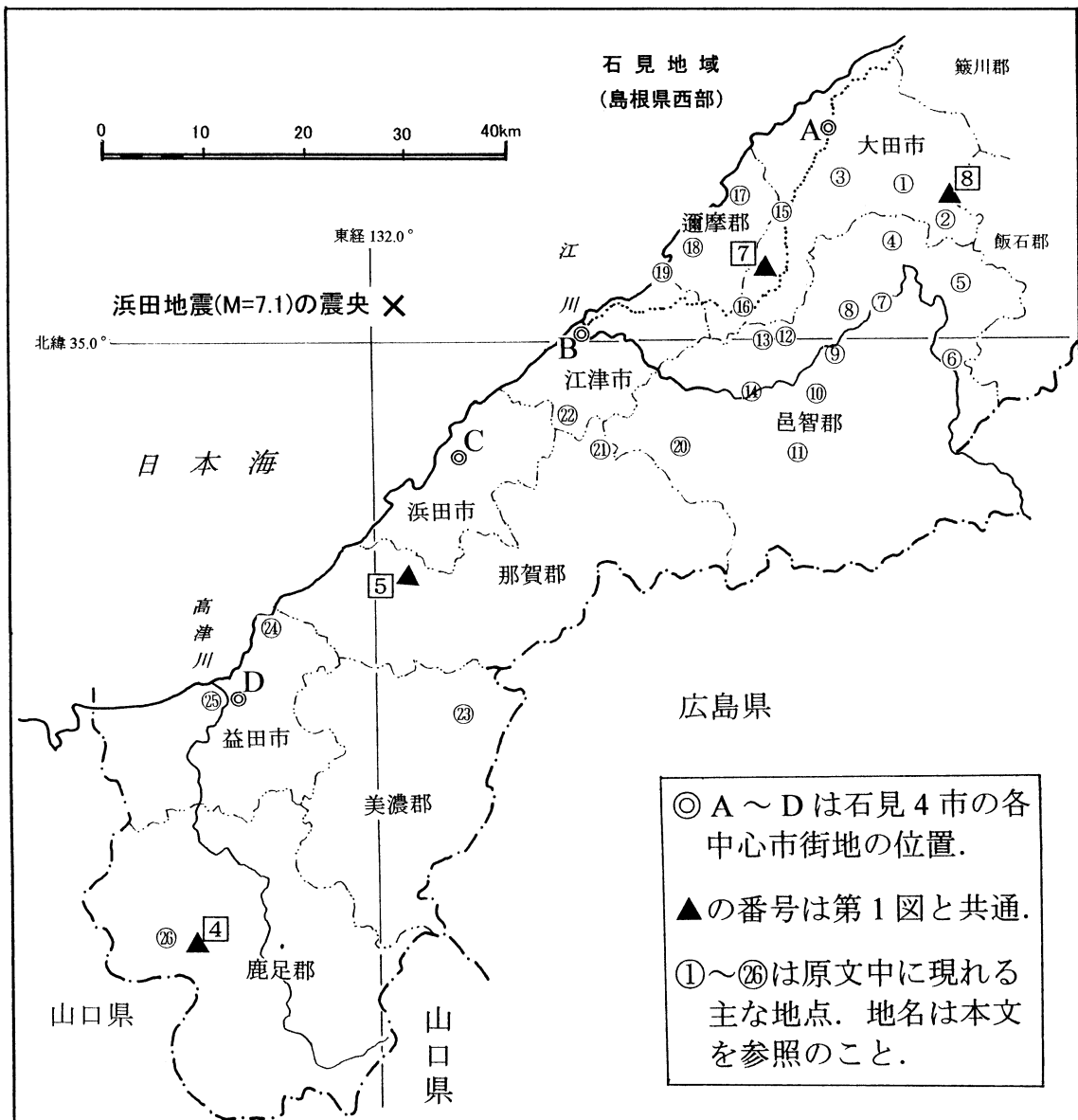
学理上ではこのように分類されているけれども、死火山とされているものでも突如活火山にもどったり、活火山であっても休火山に衰えてしまうものもある。元来、死火山といっても猛烈な活動をするのがないとは限らない。活動を始めたり、また、活火山であっても衰えて休火山になるものもあり、休火山でもかならず噴火するとは限らない。しかし、たとえ爆発のおそれがあっても、その場合は何らかの前兆があるから、学理的研究によって被害を避けることはできる。たとえば、イタリアの活火山では猛烈な噴火が繰り返されているにもかかわらず、人々はうまくその被害をまぬがれ、山野はよい農耕地になっている。ましてや、温泉のあることによって、地熱が残っているから噴火はかならず起こるなどとむやみに恐れを抱くことなどは無意味というべきである。

前述の噴火山の中で、昔の激しい噴火の跡は三瓶山⑧、大江高山⑦、女亀山⑨などで著しく、これらの山々の付近10数kmはその火砕物が堆積している。なかでも三瓶山⑧はその中腹に10haあまりの大きな噴火口を持ち、最も低いところ10aあまりは小さい池〔室の内池〕となっている。そこから200mあまり西北西には、俗に「鳥の地獄」とよばれ15㎡余りの一画に小鳥や小動物の遺骸が散らばっているところが

ある。羽の色の鮮やかなものは最近死んだもの、白骨化したものはずっと前に死んだものであろう。ここは地学上は炭酸噴気孔(mofette)といい、火山の余力がなお地下の二酸化炭素を吐き出しているところで、地上50~60cmは二酸化炭素が充満しているが、においも色もない気体だから、小動物で餌をあさったりねぐらを求めてきたものが、この気体の中にはいと哀れにも短時間で窒息死するのである。二酸化炭素は比重が大きいため、われわれ人間はこのような不幸にあわずにすんでいる。

この火口から400~500mあまり南東におりると熱泉が湧きだしている。志学②の温泉場まで800mほど箱桶でひいているが、それでも熱くて入浴できないので、しばらく冷ましてから使っている。この鉱泉は明治5年の震災までは、泉量も温度もそれほどではなかったで、お客もすくなかった。志学温泉の名が有名になったのはここ数年のことだと浅利〔江津市街地の北東4km〕の鳥田氏は言っていた。また、この地震の後では、温泉津⑱の鉱泉は逆に水量と温度が下がったが、志学②は地震を境に泉量も温度も上がり、なお増加しつつあるとの噂があると大森銀山⑮の工学士大原順之助氏は言っておられた。

大江高山⑦や三瓶山⑧のまわりには志学②、千原⑤、小屋原〔①の北東1km〕、温泉津⑱、福光⑲、上も福⑳、天河内⑰などの温泉がある。冷泉の湧くところはとても多く、私が



参考図2 原文に現れる島根県西部(石見地域)の主な地点。

- ①池田 ②志学 ③川合 ④湯抱 ⑤千原 ⑥長藤 ⑦築瀬 ⑧地頭所 ⑨川本 ⑩井原
 ⑪矢上 ⑫湯谷 ⑬北佐木 ⑭大貫 ⑮大森・大森銀山 ⑯大家 ⑰天河内 ⑱温泉津 ⑲福光
 ⑳長谷 ㉑追原 ㉒上有福 ㉓道川 ㉔鎌手 ㉕高津 ㉖津和野

図中の点線「A～⑮～⑯～B」は旧山陰道。×は理科年表(1998)の値を图示。

見聞きしたもののだけでも川合③、大江〔大家の誤記か〕、北佐木⑬、湯谷⑫、湯抱④、築瀬⑦、地頭所⑧、川本⑨、長藤⑥、塩谷〔⑥の北東4km〕、原〔?〕、井原⑩、矢上⑪、長谷⑫、追原⑫、福光⑱などがあり、これらは、安濃〔大田市〕、邇摩、邑智の三郡すなわち三瓶火山⑧や大江火山⑦に接する場所にある。なおここに洩れたものと、一村内で数カ所に湧き出ているものを合わせると、その数は実に多数にのぼることになる。これらの多くは炭酸鉄泉で泉口に褐色の沈殿物が付着している。清涼飲料になるものも多く、川合③のものはとくに濃度が高いという。

明治5年の震災のおり、浜田市街地の4km内外の範囲では、土地が著しく隆起したところと沈降したところがある。市街の北、浜田川の川口は地震の後は50～60石積みの船〔船足の深さは不詳〕が楽に入れるほどに深くなったといわれ、また、4kmほど西の長浜の沿岸は1.3mあまり陥没して海水が陸地に入り込み、水面に出ていた岩が海に潜ってしまった。浜田市街地近くの青川〔原文には「青江」とあり誤記と思われる〕では地面が高まり、また、北東約6kmにある下府海岸の褐炭が挟在する第三系の砂岩層は、一面に隆起して千疊敷といわれる名所となった。当時、干満の差が大きくなっ

たので心配されたが、さいわい津波による被害はそれほどでもなかった。

以上の多くは実際に視察したことである。また以下は、震災当時場所によって揺れの程度に差があったことを知るためのよい例として、各地で聞いた震災に遭遇した人たちの話を記す。

な かの賀郡鍋石村〔浜田市街地の南方 10 km〕藤井宗雄老人の筆記摘要

明治 5 年旧暦の 2 月 6 日〔新暦では 3 月 14 日。〕午後 4 時ころ、地震があって山は崩れ、海水は溢れ、家は倒れるなど、今までに経験したことのない大地変が起こった。石見〔島根県西部〕は最も揺れがひどく、出雲〔島根県東部〕、安芸〔広島県西部〕、長門〔山口県北西部〕は軽かった。石見の中では那賀郡〔現那賀郡と浜田市・江津市を含む地域〕が最もひどく、邇摩郡、安濃郡〔前出〕、邑智郡はこれに次ぎ、美濃郡〔現美濃郡と益田市を含む地域〕や鹿足郡はやや軽かった。同じ郡や村の中でも揺れの激しさに違いがあり、大江〔前出〕あたりのいくつかの村は全滅に等しい状況であった。長浜〔前出〕は約 1.3 m も地面が下がって海が浸入してきたのに、原井〔浜田市街地の一角〕は隆起して海が数十歩退いた。また、江津市街地では海水が逆流し、大貫⑭の大きくずれ〔江川右岸〕をはじめ形の変った山もあった。島々の間で高低差が現れ激しい海鳴りがした。海底は裂け、地中からは土砂が吹き上げ、井戸から水が溢れ、川の流れが堰き止められて滞りができ、水陸が入れ替わり、橋が落ちて馬も歩けなくなった。このときは鳥も飛ばず、獣も走ることができなかった。(中略)

当日は夕飯を炊くころ弱い地震があった。しかし、昔の安政のころの三度の地震でなれていて大して驚きもせず、なんの用心もしなかつたら、1 時間ほどしたとき、すさまじい音とともに天地が崩れるような地震が来て、立ち並んでいる家は片端から倒れていった。親を助け、妻を救うこともできず、兄弟は離ればなれになり居場所もわからず、ただただ自分だけが助かろうとあわてふためくうち、あちこちから火が出て燃え広がり、髪を焦がし手足をただれさせ、生きたままで煙に噎んでもだえ苦しみ、倒れた梁や柱で背や腰を挫くなど目も当てられぬ有様となった。

このとき管内〔範囲不詳；当時の浜田県か？〕では田畑の損壊約 1386.41 ha、潰れた家 4588 軒、半壊 8365 軒、焼失 214 軒、損害を受けた蔵など 32 棟、死者 498 人、けが 755 人、死んだ牛馬 113 頭、同けが 75 頭、堤防損壊 7415 箇所、道路橋梁損壊 5344 箇所、山崩 5088 箇所。ほかに美濃郡からの追加の届けによれば、道路、橋梁、堤防、田畑、川岸の損壊〔原文には「岸損」とあり〕1015 箇所などの被害が出たという。(中略)

今度の地震前、明治 4 年の 11 月、12 月および明けて 5 年の正月〔いずれも旧暦〕と三度の大雪があり、ことに正月は稀な大雪だった。また 12 月 26 日〔このあと原文に(下には 28 日とあり)とあるが、「下」が「下記」の意なら、後述の増田氏の談話のなかの「28 日」を指すと思われる〕の夜、北の空が赤く火のようになり、正月 4 日には二日間にわたって見

え、さらに 2 月 5 日は三重の暈が現れた。(中略)

延宝 4 年 6 月 2 日〔西暦 1676.7.12〕の地震では、津和野⑳で家の倒壊 133 軒、即死 7 人、けが 35 人という記録があり、最近では安政元年 11 月 5 日〔1854.12.24〕と同 5 年 12 月 2 日〔1859.1.5〕ならびに同 6 年 9 月 9 日〔1859.10.4〕、10 日、11 日、16 日にもつよい揺れがあった。(下略)

邇摩郡佐摩村大森在勤増田齡造氏の話

明治 4 年 12 月 28 日〔旧暦：震災の 1 ヶ月あまり前〕の夜、宿直で役所にいたら、午前 2 時〔原文には「午後 2 時」とあり誤記と思われる〕ころ「火事」との叫び声を聞いて起きてみたら、東の空が赤々としてちょうど遠方の火事のように見えた。しかし、夜が明けるにしたがって見えなくなった。

関連して言えば、北東方向の空が焼けたように見えたのは一晩だけではないようだ。震災の激しかった地方は、どこでも北東の空が焼けたように見えたらしい。人々は自分の居場所から火事の現場を見ることはできないので、津和野㉑あたりの人は益田の方が火事だと思い、益田の人は浜田あたりが、大森⑮の人は大社〔三瓶山㉒〕の北方 30 km あたりが、大社では隠岐が火事だと思ったという。

(以下次号)

地学雑誌第 1 集第 4 卷〔明治 22 年 4 月 25 日刊〕所載

明五石見震災

〔第 3 卷の題名から「の」の字が抜けている〕

〔以下の記述は、前号第 3 卷の大森在勤増田齡造氏の談話の続きと思われる〕

明治 4 年から翌 5 年にかけては雪が非常に多かったが、1 月の末から 2 月〔旧暦〕のはじめにかけて、大森⑮、浜田・益田等の市街地の井戸水が急に枯れたり減ったりして濁ったという。

2 月 6 日〔旧暦〕になって午後 4 時ころ地震があって、人々は戸外に飛び出したが大したことはなかった。すると 6 時ころ再び地震が来て上下左右に大きく揺れ、壁や石垣は崩れ、寄宿所〔恐らく増田氏の宿所〕の庭先に大きな亀裂ができて、何ともいえない臭い泥水が割れ目からほとばしり出た。天地も崩れるばかりの激震の中、人々の悲鳴が聞こえすさまじい光景であった。

当日は朝から霞んだような日と風はなく、多少暖かかったようだ。大振動の最中は四方が暗がりとなって風は無く、ちょうど雲煙の中にいるような感じで、火山の噴火に出会ったような気持ちであったと記憶する。そんな中にも鳴動があるたびに空が赤く輝いた。その夜は絶えず余震があり、翌 7 日は平穏であったが、ときどき大きな揺れがあった。大森⑮のとなり村の萩原〔㉓の南東 4 km〕では、揺れがいつまでも止まらなかったという。

この地震の 5 日後、巡視に出て池田①へ行つたが、同地内小田の大谷家付近は全戸が 3 m ほどの土砂に埋もれ、浮布の池の弁天島は半分が崩れていた。志学は被害がことにひど

く、佐比売野〔「三瓶の野原」の意、三瓶の西の原のことか?〕は土塊が隆起して土饅頭をつくり、濁り水が吹き出し続けた。三瓶山は何度も鳴動して山腹から岩塊が転がり落ちた。池田①では3日ほどして、崩れた土砂の3mほど下から死体が掘り出されたが、死者の爪はみな剥がれて無かった。体が埋まったとき、土砂をかき分けて地表に這いだそうともがき苦しんだ結果と考えられ、見るものをして慄然とさせたという。

激しい震動の中では人は生死の境にあって心奪われ、周囲の事物を見極めることはできず、夢の中にあるような状態なのだが、震動は北の方から揺れ伝わってきたという感覚がある。明治5年は日がたつにつれてだんだん地震が小さくなり、翌6年には地震はごく少なくなった。震災の後、津和野②へ行く道々で見聞したところでは、大家⑬はもっとも震動が激しく、次が邇摩・安濃〔前出〕・邑智の三郡、続いて出雲大社〔前出〕地域であったという。

那賀郡浅利村〔前出〕島田氏および大家本郷村某の口演

明治5年2月6日〔旧暦〕午後2時ころ地震があり、瓦〔此地方赤瓦の産地にして矮小の民家と雖も之を用ゆるなり〕が落ちたり石垣が壊れたりした。5時過ぎ轟然とした響きとともに大地震が起こった。地上に放りあげられるような気持ちがして歩くこともできず、だれもが這って屋外に逃れた。戸障子がすべて倒れてしまって、家から出るには難儀をした。大家⑬などでは大地が裂け悪臭のする濁り水が噴出し、大江高山⑦の麓の人家は10mほどの地中に埋められ今だに所在が分からない……。〔以上島田氏〕

マサッチという粗粒で空隙の多い砂質土〔原文に（花崗岩の土砂或あるいは安山岩の灰塵）とあるが、大田周辺では三瓶火山に由来する軽石流堆積物をマサッチと俗称している〕からなる傾斜地では、家屋は建ったまま400~500mも押し流された。傾斜地の粗い土は、堅い下盤が震盪すれば崩れ下るのは当然である。これらの土砂は、噴出する水で泥沼状態になっており、歩くのに難儀をしている人や家畜を埋めてしまった。

大家⑬では、一家四人のうち奇跡的に助かった若い婦人の話によると、家から逃げ出した後土中に埋まり、真っ暗な中に閉じこめられ奈落の底にいたと思ったら、次の瞬間、突然地上に押し上げられて日の光を見た。一度は地獄におちたのだと思ったけれど、日の光を見たことで生きていたと感じた。何度もお日様の光を仰いで生きていたことを確かめた。その後付近をよく見ると、足だけが地上に出て息絶えているもの、1mほどの土に埋まって死んでいるものなどがおり、言葉には尽くせないほどの惨状だった。

大家⑬は雪の多いところだから町の家屋はがっちり造られている。それでも家が潰れて死人が出たが、東隣の新屋村〔⑭の東2km〕はこのあたりで死傷者数がもっとも多かった。また、大家⑬南方の大貫⑮では、地震が起こった時、数人が江川沿岸の竹林へ逃げ込んだ。そうしたら背後の山が崩れ、その土砂に竹藪ごと押し流され、川幅が100m以上もある対岸〔左岸〕の田津村まで持って行かれたという。それはアッ

という間のできごとで、その後この山は「大きくずれ〔前出〕」と名付けられた。花崗岩の絶壁〔右岸〕は、今でも江川を行き交う船から見るができる。

浜田市街地から西20数kmの鎌手⑯に行く道は、土砂崩れのため通行がほとんどできなくなっていた。そこから西はやや被害が軽いように見え、破損箇所も多くないと見ていたが、しかしながら益田市街地の旅館の人は、雨も降らぬのに井戸水が濁ったことに気づき、また、その夜が晴れているのに、一晩中どこもなく空が明るかったように感じたという〔地震前夜なら新月に近く夜は暗い〕。益田での揺れ方は、1mほど間隔のある土蔵の屋根と屋根がこすれあうほどで、西の高津⑰では棚のものがすべて揺れ落ち、地震動は次の日まで続いたという。

山口県北端の田萬村〔島根県との県境〕では、地震の時、土瓶や茶釜の水は7~8分位がこぼれ、棚のものも多くが落ちた。最初小さく揺れた後、30分ほどして大きく揺れたが長くは続かなかった。

浜田市街地の南方約30kmの道川⑱にある旧家の当主美濃地表熊氏が言うには、明治5年2月6日〔旧暦〕の地震の時、山間にあって平地が少ない当地では、人々は我先にと飛び出し周囲の山からの落石などを避けた。しかし、幸いにも家屋が倒れたりすることはなかった。その後およそ5日間くらは平地に地震小屋を建てて暮らした。前年〔明治4年〕12月28日〔旧暦〕さきの増田氏の談話と同じ日にあたる〕には北の空に火柱のようなものが見え、年末ということで我が家〔美濃地家〕に集まっていた人々のうち、芋原〔北方の集落〕のものたちはあわてて帰宅したが、火光はもっと北の方に見えたという。道川⑱の南方約20kmにある広島県戸河内あたりでは、揺れはしたが被害は出なかった。

兵庫県豊岡にいた人の話では同地もかなり揺れ、器の水が7~8分こぼれ、高い木に巣を掛けた鳥はなかなか啼き止まなかったらしい。この人は岡山県津山の人で、家からの便りでは、津山でひどい揺れはなかったという。

ついでに言えば、筆者〔巨智部氏のこと〕は山陰道を東から西へ歩き、石見の安濃郡〔前出〕に入って初めて大震災の状況を聞いた。だから中国火山脈につながる兵庫県、鳥取県および島根県の出雲地域での地震の様子を、それぞれの地で聞いておかなかったのが非常に残念である。

まえに、中国火山脈の配列のところで述べたように、山陰道には火山岩が多く、中でも兵庫県の城崎郡、二方郡〔不詳〕および島根県の石見東部は、温冷の鉱泉に、岩石の性質に、また地質の構造に照らして中国火山脈のもっとも新しい部分であること、地熱が衰えていない場所であることを、地学研究者はぜひ調べてほしいものである。

筆者〔巨智部氏のこと〕は昨年〔明治21年〕11月2日の夜には松江に、7日の夜は飯石郡の掛合〔三瓶山⑧の東北東20km〕にいて、ちょうど遠雷のような地響きを聞いた。これは火山地方には時々あることだ。石見にある多くの温冷炭酸鉄泉の湧出地は、もともと台地が揺れ動いたときにできた大地の割れ目であって、大森銀山も安山岩の中に包まれている

のだから、三瓶山や大江高山のような同じ種類の岩石と同時か、またはそれより後でできたことは明らかである。大森銀山⑮の炭酸鉄鉱の鉱脈は、当時鉱物溶液を湧出した割れ目である。また、鳥根県の出雲平野から宍道湖および中海に達する長い溝のような地形は、地質時代に地殻の収縮にもなってできた割れ目であって、そこから嫁が島⑩、手間天神島⑫、大根島⑬などの火山岩が噴出したことがわかる。だから、このようなところは地震が多く、また地震によって生じた事象に触れることが多い。これも地盤の割れ目やそれによって生じる断層が多く、地盤が脆弱なことによるのである。しかし、火山の噴火や地震の災害は、兵庫県北部や鳥根県西部に限られるというものではない。地中の蒸気が増加して地表に爆発が起こるのは、地表近くのもっとも弱いところであるが、この弱点がどこにあるのか、目下どこに爆発が起こる可能性があるのかは、これは人智の及ばないところとして残念ながら研究を断念せざるを得ない。

ただし、温泉のある地域の人々は温泉の性質の異常、たとえば泉量の急激な増減、塩酸分・硫酸分・硼酸分の増加とか井戸水の増減、反復する小地震、山地の鳴動、潮位の異常な変化、^{そらやけ}天光などは多少とも地熱が発生したことを知らせる現

象だから、つねにこのような点に注意をはらい、このさき災害に遭わないようにと願うものである。

終

あ と が き

原文では日時に整合性を欠く部分がみられるが、これは明治5年末に改暦〔明治5年12月3日を明治6年1月1日とする改暦〕があり、浜田地震は改暦前、巨智部氏の聞き取りは改暦後なので、そのような事情から若干の混乱が生まれたのではないかと想像する。

本文の基である巨智部氏の報文は、コピーを鳥根大学名誉教授徳岡隆夫氏（徳岡汽水環境研究所長）から頂き、口語調にすることについての示唆も賜った。鳥取大学教育地域科学部教授の岡田昭明氏には、鳥取・兵庫県の山々の位置や名称についてご教示を頂き、また、元鳥根県立飯南高等学校長の大場格氏には口語調への変換という観点から本稿の校閲を賜った。記して感謝の意を表する。

（受付：2002年10月7日、受理：2002年10月31日）